利用状況と市民のニーズ

「ころころの森」施設長
石井　知子

ころころの森は、準備期間に半年、開設して半年になった。

毎日大勢の親子が遊びに訪れて、利用者数は大人九九一二人。子どもは一〇八八七人。になる。月平均三四六六人で、日によってバラつきはあるものの平均すると一七〇人くらいの利用となる。

登録制になっているのだが、大人二八四六人。子ども二三一三人。の方が登録している。

利用の頻度は、月に数度、週に一、二度が多く、リピーターが多い。

年齢別利用者をみると、〇、一、二歳児の子たちの割合は八五％である。一歳児が一番、その次が〇歳児、そして二歳児の順番になる。

来館方法としては車が41％。駐車場があるのは利点になるけど、一階の社協と一緒に使用する都合上整合制をどうつけていけばよいかむずかしいことでもある。できれば公共機関を使ってとお願いもしている。

〈利用者の声から〉

ハイハイから歩く頃の子どもにとって、この様な広い床の空間はとても良いと思いました。

私は男性ですが育児休暇を取り、（6ヶ月から一年の間）子育てに関わってきました。親と子の二人きりの子育ては大変だと感じました。この様な広場で、他のママやスタッフの方々とお話ができたことは大きな助けとなりました。

男としてこの様な場に来ることは最初ためらわれましたが、スタッフの方々が「受け入れてあげたい」「何とかしてあげたい」という思いで接してくれているのが伝わってきたのでとても勇気づけられました。

子育てに関わろうとする男性にとってこの「受けいれてくれる」という気持ちは、とてもありがたく感じました。（やはり女性の中に入るのは大変ですから……）

私もこれから子育てしていくにあたって、ここでの気持ちを大切に他の人と接していきたいと思います。

ここでエネルギーを発散させていただいたおかげで私の息子はとても元気で子どもらしい子どもに育っていると思います。スタッフの皆様ありがとうございました。

（30代・男性）

〈利用者評価アンケート集計について〉

十二月にNPO法人HUGこどもパートナーズに依頼をして調査をききとりで百三十六人の方からもらう。

(1)施設全体の印象は、あたたかい、安心、手作りのものが多いという、ころころの森らしさの評価をもらう。きれい、広い、明るい利用しやすい、落ちつける。土曜日はパパと一緒に家族で過ごしていく人達もいる。子どもが楽しそうに遊ぶ姿がみられるからと常連のパパも数人いて顔みしりがふえている。

(2)東村山市の自慢になっているこの施設ができたことで生活にどんな変化があったか。

遊び場が増えて便利、助かる、雨の日に出かけられる。ママ友ができ、子どもの月齢が同じくらいのお母さんと話ができる。

子どもが友達とふれあう機会が増えた。

二人きりでいるより、気分転換ができた。

よく遊ぶので子どももよく寝てくれる。子どもの刺激になる。

遊び場ということだけでなく、人のつながりもできてきている。

育児不安やストレスの解消へもつながる意見もあり。

子どもの発達を促進するという意見もあった。

(3)どんな目的で利用しているかは、子どもを遊ばせるがメインだが、ママ仲間と話をすることや、一息つくことも目的になっている。

(4)友だちを作りやすい雰囲気かは、はいが半数を超える。実際に友だちができた人も32％、さらに増えていけばよいと思う。

(5)おもちゃ、本、備品については、非常に好評。「手作りおもちゃを家でも参考にしたい」という点が、ころころの森での子育て支援に留まらず、家庭での育児を応援していることになっている。

(6)スタッフの対応については、うれしかったこと多い。声をかけてくれること、悩みを聞いてくれること。困ったことは少ないが、乳児の母が活発な子どもや大きい子に対して危ない、怖いと感じている場合に、スタッフが注意してほしいという要望もある。助かることとして、一時的に見てほしいという意見があった。双子の子の利用が多いけれど、見守る余裕のある時はしてあげている。母がトイレにいってくるあいだみてあげることもある。下の子の授乳しているときに、上の子と遊んであげることもある。

(7)ころころの森の講座やイベントに参加したことがある人は38%。おおむねが好評である。センター長の話、つくしんぼの日（計測）が特に好評であった。誕生会はひろばの中でみんなに見守られ、保護者にもよく頑張ったネと労いをこめて、子どもを温かく祝福する場になっている。

土曜日にするので、パパや祖父母も一緒に家族での参加も多い。食育講座は人気がある。食に対する悩みも多くて、困っていることに答えてもらえて、ほっとしている様子があるので大事な取り組みと実感している。「二歳児の子育て講座」も、子どもの扱いに手をやいている母親たちの生の声を聞いて家庭に帰ってから役に立つような子どもへの関わり方を伝えていけるように企画をする。希望者が多いことがわかり、今この時期に求められていることなので、あまり間をおかずに、追加で同じ講座をしたら喜こばれた。講座は保育つきで、親達が集中して話しが聞ける環境にしていくことを、親は強く希望している。できるだけそういう形にしていこうと努力をしている。情報提供ももっと工夫していかねばと思うが棚を作ったりみやすいようにはした。

(8)要望としては、一時預かり・託児サービス・病児保育等がでている。ちょっとみてての延長のようで、一、二時間でも買い物に行けたらと母親のリフレッシュが希望として非常に多い。

〈大きなひろばのもつ課題〉

ひろばとして大きなスペースがあることはのびのびと子どもは遊べて、開放感と自由さの温い雰囲気がうまれている。

同時に「屋内の公園」として、利用する人も多くでてくる。おもちゃを片付けない、食べたあとの片付けが雑で床に散らばっていたり、トイレに紙オムツを置いていく。

「共につくっていく関係」がすっとんで、親をお客さんとして招くスタイルになっていくようで怖い。

どうしたら一人ひとりと心を通わせ参加した親同士をつなぎ、親同士で助け合い、支え合えるような人のつながりが育っていけるのかと考えてしまう時もある。

屋内施設の充実は、外遊びの機会を奪うことになっては、残念である。つたい歩きやハイハイをしている赤ちゃんにとっては運動するのに適したつくりなっているけど、外気にふれて大型の遊具で遊ぶことも大事であることも提案していきたい。

二歳以上の子どもへの配慮は、環境面もスタッフの関わりという面でも、様々な企画でも、求められている。

〈子育ての総合的な支援拠点として〉

センターの運営にあたっては、公正な方法により市民ニーズの把握に努め、各事業にあたっては、そのニーズを十分に加味した上で、常に広く市民のための運営となるよう最善を尽くすこと。

以上のことは運営業務委託仕様書にある。「すべての子どもと大人が一緒に育つまち」を実現にしていくためには、市民同士が地域ぐるみで子育て支援を行えるようにセンターが子育ての総合的な支援拠点として位置付けられ、地域との連携が重視されている。

子育て支援者として活躍できるような人材育成を行うことは「子育て支援を通した多世代間交流の促進」になる。

「多世代交流コーディネーター」や「ジュニアサポーター」の養成講座を開催して、積極的に子育て支援に関わる人を地域から発掘していく取り組みを今年度の事業計画にもりこんである。

白梅学園の先生方の力をかりて、「心身ともに健康な子どもを育てること」と「子育てしやすい社会をつくること」のために「ころころの森」が子育て支援の機能を果たさす目的をもっている。